

教職課程の授業における「ケースメソッド教授法」 の可能性

—慶應義塾大学ビジネス・スクール視察を通して—

中居舞子（広島大学大学院・院生）

1. はじめに

教職課程担当教員養成プログラムは、慶應義塾大学ビジネス・スクールで開講されている授業「ケースメソッド教授法」の視察を行った。実際には「視察」というより、受講生として授業に「参加」することができた。そのため、私たちにとっては「ケースメソッド教授法」を体験することができる貴重な機会となった。参加者は、それぞれ異なる関心—もちろん教職課程の授業に関わることではあるが—のもと、目的意識を持って視察に臨むことができた。各参加者の学びについては、それぞれの頁を参考にさせていただきたい。

本稿では、視察の目的や内容について報告し、さらに「ケースメソッド教授法」を体験したことで得られた私自身の学びを整理する。

2. 視察の目的と概要

（1）ケースメソッドとは

ケースメソッドの起源は、1920年代にハーバード大学のロー・スクールで始まった判例研究授業にさかのぼる[ケースメソッド教育研究所 HP]。その後、ケースメソッドは、法学や医学などの各専門領域の性格に対応して、それぞれ独自の発展をとげ、固有な性格を形成してきた。例えば、法学教育におけるケースメソッドは、法学原理の教育を目的とし、判例を提示し、教授の質疑と学生の応答を通して、法学的な推論と判断を求める方法として発展してきた[佐藤 1997: 126]。それに対して、ビジネス・スクールのケースメソッドは、経営問題の解決能力の形成を目的としており、事例の具体的状況に対する理解、および問題解決に向けての専門的な判断力と遂行能力の訓練を求める教育として展開されてきた[同上]。

現在、慶應義塾大学で行われているケースメソッドは、ハーバード大学ビジネス・スクールが中心となって、「判例」を「経営事例」に置き換え、発展させてきたものである。ケースメソッドは、アクティブ・ラーニングの一形態としても、そして専門職養成に相応しい授業方法としても、近年特に注目を集めている。ケースメソッドは、学問的理論と実践的問題の結合をはかるもっとも有効な方法とされているからである。

(2) 視察の目的

近年、グローバル化や情報化、少子高齢化など急激な社会変化に伴い、「大学教育の質的転換」が叫ばれている。主体的な学修の体験を重ね、生涯学び続ける力を修得することが、学生に求められるようになったのである。従来のような知識の伝達・注入を中心とした講義型の授業から、学生が主体的に問題を発見し解を見いだす「能動的学修（アクティブ・ラーニング）」への転換が必要とされている。

教職課程授業もまた、例外ではなかろう。教職課程を担当する教員が能動的学修を実現するための授業設計をするのはもちろんのこと、教員免許を取得して教育現場へ出た学生が、子どもたちに能動的学修をさせていくことこそが重要である。そのような「教え方を教える」教育は、まさに今回視察した授業の目的であろう。「参加者の自主的判断と行動の能力を啓発すること」[竹内 2010: 11]という、ケースメソッドの教育目的を達成させることのできるディスカッションリードの技術が、教師に求められるのである。

(3) 視察の概要

- ・ 日程：2014年8月28日（木）
- ・ 授業科目名：ケースメソッド教授法
(慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程／修士課程併設科目)
- ・ 授業者：竹内伸一氏
- ・ 参加メンバー：本プログラムを受講する博士課程の大学院生6名
(D3：2名、D2：2名、D1：2名)
- ・ 当日のスケジュール：
以下の通りである。

10:00～10:10 オリエンテーション

10:10～11:10 レクチャー&ディスカッション：学びの共同体を築く

11:10～13:30 ディスカッションリード演習(ケース「あの人が話し出すと授業が止まる」)

-11:10～11:40 グループ討議 -11:50～12:40 クラス討議 -12:50～13:30 フィードバック

13:30～14:30 休憩

14:30～16:50 ディスカッションリード演習(ケース「町おこし起業家塾」)

-14:30～15:00 グループ討議 -15:10～16:00 クラス討議 -16:10～16:50 フィードバック

16:50～17:00 Q&A、全体フィードバック

なお、授業に参加するにあたって、事前に配布されたケース教材を読み、設問への解答を用意しておくことが課せられた。個人の予習を前提として、グループ討議(4～5人の小グループ)、その後のクラス討議、という順で授業が進められた。クラス討議では、受講生の中からあらかじめ選ばれたディスカッションリーダーが授業を進めた(ディスカッションリード演習)。

3. 教職課程の授業への示唆

(1) 「学びの共同体」の形成

既に示した通り、ケースメソッド教授法は、①事前個人研究、②グループ討議、③クラス討議、という3段階を経る。

事前の個人研究では、受講者それぞれが持つ経験や知識の中でケースを分析・検討して、本質的な課題を明確にし、具体的な実行案を準備する。それを踏まえて、次は少人数のグループに分かれ、各自の問題意識を発展させる。この段階は、議論のウォームアップとして非常に重要である。最後は、講師のリードにより、多数の参加者とディスカッションを重ねる。

このように、教授の段階が決まっているとはいえ、受講生の主体性が求められるケースメソッド教授法では、いかに「学びの共同体」を形成するかが鍵となるだろう。授業者である竹内氏は、シラバスの内容が授業者からクラス参加者に向けて発せられる第一声であると考え、「学びの共同体構築のスタートラインはここにある」[竹内 2010: 97]という自覚を持ってシラバスを作成している。

例えば、竹内氏のシラバスでは、想定する履修者が明記されている。その履修者は、ケースメソッドの学びのメカニズムを企業等で再現したいと考える人、ケースメソッドを用いた教育を企画・推進・維持する人、大学をはじめとする教育機関で教える教員やセミナーの講師などである。このようにターゲットを定めて、現在の受講者像を持ち、その上で授業を終えた後の受講者像(教職授業であれば、目指す「教師像」)を設定することが、教職課程の授業に必要であると感じた。

(2) 授業方法としての意義

教職課程の授業である「道德教育指導法」を例に考えてみよう。道德的な規範は、教師から学習者への一方的な伝達だけで身につけさせるのは難しい。また、道德性や道德的判断力を身に付けるためには、「〇〇すべき」という価値の伝達だけでは不十分である。知識よりも実践力が問われる上に、正しい答えを決め難く、個人の判断に委ねられる場合が多いためである。

このような道德教育の授業に、ケースメソッドを導入することは、どのような意義があるのだろうか。道德的判断は、状況が少しでも異なれば、その都度異なるものである。そのため、普段経験できるとは限らない特定の場面を「ケース」として切り取って教材化し、授業で討議すること自体が貴重な機会となると考えられる。また、特定の場面において「自分ならどうするか」という判断を迫られることにより、問題を自分の事として考えることができ、同じ場面と遭遇した際の判断の助けとなるであろう。

4. おわりに —ケースの内容から学ぶ、そして議論を重ねてその先へ

個人的な話をすれば、報告者は、本プログラム(教職 P)の教壇実習(実習科目は、道德教育指導法)において、ケースメソッド教授法を用いた授業を行った

経験を持つ。その授業の検討会の際に話題となり、深く考えさせられたことが 2 点ある。

1 点目は、授業者と受講者のバランスについてである。授業者と受講者、両者によって作り上げていく授業において、授業者がどこまでどのように介入するか、は常に問題となろう。議論の方向性は受講者の主体性に委ねながらも、授業者による細かな軌道修正や、発言の拾い方によって、授業は成功したり成功しなかったりする。これは、授業者のディスカッションリード技術の未熟さはもちろん、授業者による受講者への願い（どのような教師に育って欲しいのか）にも依存すると考えられる。

2 点目は、ケースを教えることと、ケースで教えることの違いである。これを考えるきっかけとなったのは、「受講生がケースを考えていて、ケースで考えていない時間が多かったのでは」という指摘を受けたことである。授業者がケースメソッドを深く理解していなかったために、ケースの内容を理解する（どのような構造になっているのかを整理する）ことに重きを置いてしまい、ケースをもとに議論を重ねて授業の目的に辿り着くという段階を踏むことができなかったのである。

以上から言えることは、教職課程の授業へ安易にケースメソッド教授法を導入してはならないということである。適切なディスカッションリードができる授業者が必要であるし、そのような授業者を育てるためにはケースメソッドの意図や狙いの正しい理解が不可欠である。加えて、教職課程の授業であるために、「教え方を教える」という使命も果たさねばならない。その難しさと向き合いつつ、授業方法や内容について研究を積み重ねていくことが必要である。

今後、教職課程の授業の質保証がさらに問われることになるだろうが、教職課程担当教員それぞれの個性が失われることなく授業が続けられることを願う。

参考文献・URL

佐藤学『教師というアポリアー反省的实践へ』世織書房、1997年。

竹内伸一『ケースメソッド教授法入門—理論・技法・演習・ココロ』慶應義塾大学出版会、2010。

慶應大学大学院経営管理研究科公式ウェブサイト「慶應型ケースメソッド」

<http://www.kbs.keio.ac.jp/about/casemethod.html> (最終アクセス：2015年3月25日)。
ケースメソッド教育研究所公式ウェブサイト <http://www.casemethod.jp/index.html>

(最終アクセス：2015年3月25日)。